

第7回 東南アジア分科会

日時: 2007年12月20日(木) 15:30 - 17:00

場所: 東京文化財研究所 第一会議室

参加者: 上野邦一、柴山守、宮崎恒二、大和智、友田博通、中川武(以上、委員)

浅野敦行(文化庁) 守山弘子(外務省) 井上和人(奈良文化財研究所) 清水真一、稲葉信子、二神葉子(以上、東京文化財研究所) 豊島久乃、田代亜紀子、谷口仁(文化遺産国際協力コンソーシアム事務局)

1. 地域情報学からのハノイ・プロジェクト

柴山守(京都大学東南アジア研究所)

地域情報学について: 地域研究に空間情報学の概念をいれ、2005年から5年間、科研基盤Sで研究を進めている。手法としては、マッピング、データ・マイニング(様々な情報のなかから共通性を抽出する)、フィールド・サーベイに基づく検証、モデリング、シミュレーションである。プロジェクトは、コア・プロジェクトとしてのハノイ、そしてアユタヤ、そしてリソース・シェアリング、個別研究者による研究に分かれている。本プロジェクトは地域情報学を展開する、もしくは構築するということが主な目的であり、ハノイはひとつの事例である。3つの事項があり、ひとつは歴史遺産(もしくは遺跡)の保存検証と約1000あるといわれる遺跡のデータについて準備すること。ふたつ目は、ベトナムと日本の歴史を探り、ベトナムそのものの歴史の中でハノイがどのように発展してきたか考えること。もうひとつは、情報学の視点から種々のモデリングとその結果を世界に公開していくことである。

ハノイ・プロジェクト: まず2005年に、ファン・ヒーレ教授をはじめハノイの代表団に来日してもらい、ハノイ・プロジェクトについて議論した。研究内容としては、地図資料の収集をおこない、デジタル化しデジタル世界で比較をする。また、150か所の遺跡の情報収集が終わった。ポイント・データや写真等々を収集して現在マッピングの作業をしている。ハノイの村落変遷の資料収集とマッピングをすすめている。フランス統治期に建築された近代建築の情報収集についても研究をおこなっている(東京大学太田先生協力による)。旧市街の遺跡調査(東京大学桜井先生による)。また、ハンロム研究所と協力をして1000碑文の拓本収集をしている。ハノイ中心部の地形モデルを構築中である。そのために、ボーリングデータを現在収集している。また、リモート潜水を使い1970年代から現在に至る都市被服の分布を調べている。

これまでの研究成果として、桜井仮説というものがあり、19世紀のフランス統治下での旧市街地南部の新興開発についてだが、1890年から10年間大規模な開発がおこなわれており、一部開発がとん挫していたことや、開発が黄河の方から西の方にすすんでいたこと、また堤防の役割などが明らかになった。2005年当初は資料も全く手に入らなかったが、2007年にはいって急に資料が集まってきた。

2. タンロン皇城遺跡保存に関する報告

上野邦一(奈良女子大学 COE 特任教授)

12月タンロン考古班遺構解釈についての支援:A・B区の遺跡の変遷再調査を行った。東側にある遺構をベトナム側は道と判断していたのですが、これは煉瓦でつくった塀だと考えられる。それから、真ん中の東西にある遺構も塀だろうと思う。A・B区の遺跡の概要が把握でき、その意見は全部ベトナム側に述べたが、塀か道かという点では同意できなかった。その他については意見の違いはない。

ベトナム側は去年6月に中心軸を保存地区にしている。中心軸がコアゾーンで、その周りの広い範囲をバッファゾーンとして世界遺産にしたいとしている。2008年10月に正式申請することである。最近「タンロン・ハノイ千年」という本も出版され、千年の歴史がアピールされている。ベトナム側は、コアゾーンを世界遺産にと考えているようだが、これだけでは世界遺産登録は考えられないとリチャード・エンゲルハルト氏は考えているようだ。また、ベトナム側は盛んにハノイ千年の歴史と言うが、どれくらい千年の歴史が明らかになっているのかが定かではない。その歴史を示す Physical Evidence を示す必要がある。また、ハノイ千年の歴史と、登録をしようとしている発掘区はどのように関係しているのか明らかになっていない。ベトナムにはいくつかの歴史書があるが、それに対して本当に正しいことが書かれているのかという史料批判がなく、鵜呑みにされている感がある。発掘調査でチャム文字の刻んだ煉瓦が出土しており、彼らはそれを非常に重視してチャンパとの交流があったとか、チャム人がたくさん来て都をつくったというが、圧倒的に漢字書の方が出ているので、中国文化の影響を受けた都だったと考えた方が妥当だと思うが、今のベトナムではとても言いにくい。たとえば李朝以前の時代について述べた記述や報告をほとんどみたことがない。

・申請書は誰が書いているのか。

→ファン・フィーレ先生一人で書くのは大変なので、ほかの先生方も参加しているようである。ただ、現段階では、歴史全体と遺跡との相関関係を書くのは非常に難しいと思う。

・コアゾーンについては、あまり話しが進んでいないようだが。

→コアゾーンは保存することだが、その他のバッファゾーン地区については、2007年6月に決めたとのことである。

→中心地区を国家遺跡にするということは委員会通知が出ていた。国の文化財にしたものをそのまま世界遺産にするということだが、そのままでは無理ではないかと述べた。

・ベトナム政府は世界遺産登録への申請手続きを進めているということか。

→申請について、リチャード・エンゲルハルトをよんで意見交換したかったのではないかと述べた。

方、リチャードの方は今のままではできないと言っていた。私自身もそう考える。

・世界遺産登録に向けて動いているようだが、ベトナム側の発掘担当者達は技術的に調査を進めていけるのか。

→7月に調査を行ったことは効果があったとベトナム側から聞いている。発掘調査で建物をどうやってみつけるのか、考えるのかということは非常に進歩したと思う。その後、新たな発見があったなど、成果が出ている。力をつけているのは間違いない。

・国会建設に向けての発掘調査は始まっているのか。

→取り壊している途中で、まだ発掘ははじまっていない。

タンロン保存班活動について

青木繁夫(サイバー大学世界遺産学部教授)

報告:今回は草の根文化無償で供与した機材の確認と準備、そして2月に実施する予定の研修打合せを目的として渡航した。機材は、服部日本大使立ち会いのもとで考古学院に対する贈呈式をおこなっている。その際には、気象観測装置の設置場所をA地区とB地区の間ということで合意をとった。また、金属等の保存処理機材については、収蔵庫であった場所を修復処理室として、電気配線、水道の配線などをしてもらうことで合意している。出土木材については、奈良文化財研究所の肥塚氏と高妻氏に同行して見ていただいたが、日本ではでない材質の木材が出ているため、研究的に取り組む必要がでてきている。

今回は、半日かけて遺跡保存の基本知識、出土木材存について講義をおこなった。研修については、2月下旬に測定の研修、保存機材の研修を行う予定である。測定については2月19日から実施する。研修の際は、コーロアセンターの人を対象にするのではなく、他の機関の人も対象としてほしいという要望があり、これについてはベトナム側の要望にあわせる予定である。

遺跡全体については、もともと埋め戻してほしいといていたが、今回は一部埋め戻す、もしくはブルーシートを三分の一ぐらい被せたりし始めていた。少しだが環境が改善されてきている。

3. アチェ文字文化財復興支援事業について

宮崎恒二(東京外国語大学理事)

報告:私自身は文化人類学を勉強しており、あまり文字文化財は関係ない分野だが、最近の人類学の大学院生の関心が非常に現代的なところに向かっていて、開発援助の問題だとか、技術協力の問題だとか、伝統文化がいかにねつ造されるということについて関心を持つ学生がたくさんいる。アチェの津波災害を受け、大学として何ができるかと同僚と話した過程で、アチェは歴史的

なものが多く残っているといわれているところでしたので、それに関することはできないかということで活動を開始した。アチェは古くから東西貿易の中継地であり、13 世紀にはすでに王国が成立し、東南アジアにおけるイスラームの入り口になっていた地域である。オランダの植民地化に頑強に抵抗し、20 世紀のはじめまで支配を拒むが、最終的には支配されてしまった場所である。インドネシア共和国が独立してからも反政府運動が盛んであり、独立運動があった。2004 年の津波がある意味できっかけとして和平が成立したという過程がある。完全な和平とは言い難いが、州政府と共和国全体の友好関係は修復されてきた。平和構築の一つの成功例と言えるかもしれない。

文字文化財は写本が中心になるが、イスラームの入り口だったということで、イスラームに関する知識、様式、教義、それを含めた歴史に関する文書というものが多い。一つ問題として歴史的な文字文化財が災害によってなくなる、海外に売られていく、ということがある。ヨーロッパに持ち出された文書もけっこうあるが、現地に残っているものもまだ多かった。しかし、問題はどのようなものが残っているのかというのが分からなかったことである。

2004 年 12 月 26 日の地震と津波では、インドネシアだけで死者が 17 万人ともいわれている。そのほとんどがアチェに集中しており、被災した文字文化財について、現地の文書館・図書館・大学関係者から協力要請があった。そこで、まず文書の専門家の先生方による委員会がつけられ、その活動を引き継ぐ形で大学が組織的に活動に乗り出すこととなった。

当時、東京外国語大学は COE プロジェクトとして史資料ハブ地域文化研究拠点を実施していた。これは消滅の危機に瀕した史料の発掘、共有、情報化を目指すものである。インドネシアに関しても、スマトラからはじめパレンバン、ミナンカバウの現地語の民間文書を調べ、それをカタログ化する、できるものは電子化していくというプロセスを進めていた。そして 2005 年度にはアチェということを考えていたが、その矢先に地震津波災害が発生した。そこで、アチェに重点をシフトすることにしたのである。東京外国語大学としてはアフガニスタン政府の要請を受け、アフガニスタン国立公文書館の史料の調査、整理保存事業を進めていた関係もあり、こういった事業に乗り出した。

現地文書館は泥だらけの状態、なかなか復旧はできない状態にあった。JICA の支援が入り、行政文書、つまり土地台帳をはじめとするさまざまな経理関係の文書を修復することが第一に優先され、歴史的なものについては手が付けられなかった。したがって、歴史的な文書に対する復興支援は残った文書をいかに残していくかということに焦点が絞られた。現地には写本を所管する機関がいくつかあるが、二つの文書館は建物ごとなくなってしまった。無事だったのは博物館、アルハシミ、タノアベという3つの機関だった。アルハシミに保管されている写本についてはもうすでにカタログ化も終えたが、博物館は民間の文書を集めつつあるということで、これから協力していくことになっている。最後のイスラームの寄宿学校であるタノアベは、神秘的な存在で、なかなか中に入れてもらえない。文書を見せてくれない。どんな文書があるのか分からないといった状況である。それから歴史文書に関する写本が写本協会、公文書館、図書館に所管されており、各機関間の調整をしつつ、活動を進めている。

研究調査も、まずアチェにある史資料はどんなものが残っているのかということをもインドネシア写本学会と協力して調査した。これはすでにカタログもできあがっているが、電子化については、

権利関係の問題もあるので、部分的なものしかできていない状態にある。また、現地で文書の修復にあたる専門家をまず育てる必要があるだろうということで、ジャカルタとアチェで二回に分けて文化財保護芸術研究助成財団、文化庁の支援により研修を実施した。また、2005年には文化庁事業として被害状況とアチェの文字文化財についてのシンポジウムを実施している。タノアベについては、どのような文書が所管されているかの調査を実施し、その状態を明らかにした。今後どうように進めていくか考えているところである。

今後は、復興支援から保存支援、さらには調査ということに主体を変えていくつもりである。実際には非常に傷んだ文書をどうするかということになるが、これは我々の分野を越えているので、我々のできることは調査をして記録を残していくことであろうと思っている。そのために、世界的に広まった消滅の危機に瀕した史料に関与していこうと考えている。それに関連し、今年の3月に我々の大学と海外の4つの大学で形成したコンソーシアムがある。アチェの災害については、各国政府から多大な支援金があり、これをどう使っていくかということで、現地に復興のための機関が設立された。この一環としてアチェ・インド洋海域研究所をつくろうという話もあるようである。詳しくは聞いていないが、復興資金を使って何かの動きがはじまるかもしれないということである。

・津波で泥かぶってしまった史料については全て泥落として保存されている状態にあるのか。それとも一部しか残っていないのか。

→泥にまみれたものは全て廃棄された。直後に救出してやらなければならないが、歴史文書については全くなされなかった。一部湿ったものなどは残っている。

4. ジャワ島中部地震による被害とプランバナン寺院の建造物に係る被災に対する復興支援

大和智(筑波大学)

報告:10月21日から11月4日まで現地で活動を行った。活動内容としては大きく三つに分けて行った。まず、ジャカルタの文化観光省歴史考古局ハリ局長と面談し、活動についての説明をおこない、了承をいただいた。また、地震直後からユネスコを中心にした諸外国の支援についての情報収集も行った。ユネスコについては要請があれば技術支援をすることは考えられると言っていた。具体的にはイタリアの構造専門家でおられるクローチ博士の派遣をインドネシア側の状況、要請に基づいて考えているとのことである。また、今後の日本の協力のあり方、範囲というものを局長と話し、直接修理にかかる協力ではなく、初動調査関する支援ということで、具体的には現地における科学的な調査に基づく修理設計案の提供を示した。また、ジャカルタでは、古い写真乾板が残っているということで、みせていただいた。結果、戦前のオランダ時代の修復写真が残っているということが分かり、これについては何らかの形でもう一度収集していきたいと思っている。写真乾板のあった場所には、おそらくアチェの碑文の拓本と考えられるものがあった。非常に貴重な

ものじゃないかなと思うが、ほとんど整理がされていない状況であった。

日本から供与された足場資材と、それ以前にサウジアラビアからの資金がユネスコ経由で入って購入された資材とあわせて、ほぼガルダ一祠堂については仮設足場の建設が終わりつつある。今回の主たる目的としては、まずは文化財建造物保存技術協会の方々にも参加いただき、破損調査をすることだった。それと合わせて現地の技術者からヒアリングをし、どこまで現地で準備ができているのか、それから具体的な過去の修復技法、修復の際の材料はどういうものであったかというようなことを含めて、集中してヒアリングを行って、今後の修理設計にかかる情報を収集した。また、もう一つ今回の大きな目的として、構造解析、それから耐震診断にかかる調査があった。そのため、振動計を建物に直に設置させていただいた。また、歴史的な資料の収集も続けておこなっており、地方遺跡管理事務所にある史料が収集された。日本占領期に作成されたかなり詳しい日誌みたいなものが出てきており、それを今訳しているところである。また、今回は日本の協力を示すため、パネルの作成もおこなってきた。

・修理計画つくって日本の協力終わりということでしょうか。修理計画を向こうが受け取っただけで、そのまま埃かぶって眠ってなければいいなと思うのですが、インドネシア側が自分たちで修理を進められるのか。

→なるべく先方が参考になるというようなものにしていきたい。今インドネシア側が設計計画をつくっていて、それに基づいてやろうとしているということはある。が、具体的な修理作業、現場レベルでの作業でいうと、ほとんど何もない。特に構造、耐震対策であるが、具体的なアイデアはないので、それについて我々の科学的データに基づく解法が提示できるように努めていきたい。もしそれができれば有益な情報になるのではないかと考えている。

・インドネシアは元々コンクリート使っているが、今後どのようにしていくつもりなのか。

→今回の地震被害を短期的に見ると、コンクリートでできていたシヴァ祠堂は、見た目は少なくとも大きな被害を受けていない。一方で、そういうことに割と慎重になっていた最近の建物については大きな被害を受けている。コンクリートもうまく使えば有効な部分もあるのではないか。修理する際、一つの方針をどこまで科学的にできるか。今回の修理というのが現実的には全解体をしてもう一度見直すというような大きな構造に関わることは、経済的な問題ということが大きいですが、到底できなく、部分的に復旧せざるを得ない。ある程度コンクリートを含め新しい材料の普及をしていかなければならないのではないかと。

・昔、インドネシアがアンコールで修復をおこなった時、ユネスコからコンクリートの使いすぎだといわれた過去があるが、材料についての方針的な問題と、基本的な問題をどう考えていくのかというはある。

→ 使うときにこういう見解のもとでやっているということはきちんと記しておく必要があると思っている。

以上